

保育実習の DX ー実習日誌のデジタル化を目的とする日誌作成支援システムの構築ー

DX on Childcare field experience course - Building a writing support system aimed at digitizing training records -

門傳 みこ^{*1}, 中桐 齊之^{*1}, 向坂 幸雄^{*1,2}
Miko MONDEN^{*1}, Nariyuki NAKAGIRI^{*1}, Yukio SAKISAKA^{*1,2}

^{*1} 兵庫県立大学環境人間学部

^{*1} School of Human Science and Environment, University of Hyogo

^{*2} 中村学園大学短期大学部幼児保育学科

^{*2} Early Childhood Care and Education, Nakamura Gakuen University Junior College

Email: nc21x157@guh.u-hyogo.ac.jp

あらまし：近年、教育の世界でも DX が急速に進行しているが、保育者養成の現場では学生の実習日誌が今なお手書きで行われているのが一般的である。中には保育の本質とは異なる手書きの大変さを理由にドロップアウトしてしまう学生もあり、保育業界の人材不足に拍車をかけている。本研究では実習日誌を電子化することによる学生指導の質の向上や本来の学びを中心とした実習実施への寄与が可能かを検証していく。

キーワード：DX, 保育者養成, 実習日誌作成支援, web アプリ

1. はじめに

近年、様々な分野で DX の進行が認められ、手書き文字による記録は多くの分野でデジタル化が進行している。書くこと自体が目的に含まれる教育の世界においてもその傾向はあり、提出するレポート類のワープロ打ちに限らず、Web 媒体で提供される LMS 入力フォームなどを通じた提出形態も増えている。また、タブレットやノート PC といった情報機器も基盤的学習ツールとして急速に普及している。そのような中で、今まで手書き執筆が当然であった実務分野で実施される学生実習の記録の分野についても ICT と無縁ではなくなりつつある。⁽¹⁾看護師、薬剤師、社会福祉士の養成課程など既に専用の実習支援システムを開発し、実習日誌の DX を実現している業界もみられる。一方、幼児期の教育を担う保育の現場での実証事例は極めて少ない。その理由の一つとして紙神話とも言える手書きを重視する考えが根強い業界の特殊性も理由の一つであるとみられる。手書きは相手の想いを感じることができる、温かみがあるといった受け取り手の考え方があるが、保育現場においても保育者と保護者を繋ぐ連絡帳の電子化などが急速に進行し業界としての拒絶体質は以前ほどではなくなっている可能性がある。

実習日誌を手書きで行う大変さは計り知れない。保育士養成課程では現場での実習は合計 3 回行われ、それぞれ 10 日間実習先施設に通い、子どもたちの生活の様子や保育者の働き方を観察し、毎日その様子や実習生が考察したことを日誌に記載する。そのページ数は A4 版 2～3 ページ/1 日にも及ぶ。日誌は実習終了後に自宅で執筆され、翌日の朝に実習先施設の指導者に提出し、実習指導者が確認、コメント記入をした後、実習生に返却される。本来の保育実

習生としての記載内容の是非にとどまらず、未熟な実習生の誤字脱字や表現の言い換え等の添削も行う必要があり、多忙な現場の保育者でもある指導担当者が退勤前に返却してフィードバックできることはまれで、ソーシャルワーク実習の例ではこの一連の流れを完了させるまでには早くも 24 時間、遅くも 1 週間かかるとの指摘もある⁽²⁾。それでは実習生は指導者からのフィードバックがないまま日々の実習を行い、翌日分の日誌を記載することになり、せっかくの成長の機会を逃してしまう。さらには、こうした実習日誌の記載の大変さが保育者になる夢を諦めてしまうことに繋がる学生がいることも事実である。

2. 目的・方法

本研究の目的は、保育実習の DX を実習日誌の電子化により実現し、学生指導の質を向上させるとともに、学生の本来の学びを中心とした実習実施への寄与が効果的かを検証することである。

実習日誌が電子化されない理由として紙媒体のメリットがいくつか先行研究で挙げられている。ひとつは手書きによる非言語的伝達効果である。手書きであることにより、相手の想いが伝わる等、ICT 化することによって受け取る側の気持ちに負の変化が見られることが懸念されている⁽³⁾。また、システムに関する不安もあり、デジタルに不慣れな人は電子化されることにより、余計に時間がかかってしまうことも懸念される⁽⁴⁾。

保育実習での電子化における懸念要素は様々なものが考えられるが、今回は次の 2 点に着目し解決を試みた。1 つ目は実習日誌に記載する環境構成でよく用いられる『図』である。活動を行う上で実習日誌には保育者・実習生・子ども達がどのように動

き、配置されていたのかを分かりやすく示すために図示がよく用いられる。手書きの場合は紙にイラストを描くことができるが、ワープロソフトなどでは描画ツールが貧弱で、無理な挿入により表組みが崩れるなどその対応に追われ、実習記録の本旨以外に労力を使うことになりがちである。電子化時にも手書き以上に簡便にきれいな図を描き込めるツールを取り入れる必要がある。2 つ目は全体構成としての見やすさである。紙媒体で日誌を閲覧する場合、日誌の全体を一目で見ることができる。先行研究でも紙媒体のメリットとして同時閲覧性をあげている⁽²⁾。そこで、本システムでは記述した日誌の内容を従来の形式にあてはめて成形・表示し、その出力結果を PDF ファイル化し、簡単に閲覧・印刷できるようなシステムを構築する(図 1)。今までの閲覧画面と相違なく閲覧できるようにすることで、突然の電子化に抵抗を持っている方への負担を軽減させることができる。また印刷することにより紙媒体で日誌を見ることが可能となり、過去の日誌も簡単に振り返ることができる。

今回は予備的に、描画機能と PDF 出力機能を組み込んだアプリケーションを開発し、日誌の電子化によるメリット・デメリットを調査する。開発ソフトは Microsoft Power Apps を使用する。予備調査の結果を受け、電子化するための課題を改善したあと実際に養成現場で使用し、従前の形態に比べた執筆時間、記述内容に変化がみられるかを検証する。また現在は養成校教員による直接指導が実習期間中 1 回程度しか行えていないが、将来的には電子化により、養成校教員によるリアルタイムのスーパーバイズを可能にし、実習生指導の質の向上に繋げることが可能かについても検証を行っていく。

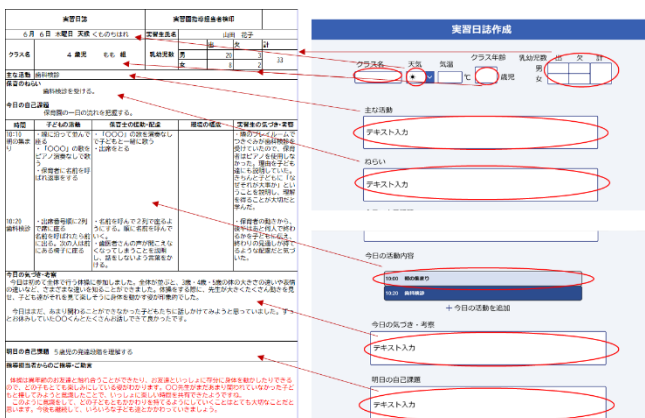


図 1 従来の実習日誌形式と web アプリの対応

3. 今後の展望

先行研究では、手書きであることで、記録の一部に線が引かれ、コメントが細かくされていることをメリットと考える学生がいることが明らかにされている⁽²⁾。そのため、教員のフィードバックは全体を通してのみではなく、適宜コメントを追加できるようなシステムが必要となる。しかし、実習指導者にと

って誤字脱字や文章表現等の添削作業は実習指導の中で大きな負担となっている⁽⁵⁾。細かな箇所の修正を楽に行えるようにシステムには「添削機能」を付随させ、誤字脱字や言葉の表現についても細かく適切に指導することより効果的な学習に繋がると期待できるだろう。

実習日誌をデジタル化することは、実習生の負担を軽減させるだけでなく、養成校教員・現場職員間の共有を容易に行うことを可能にするため、指導のレベルをより引き上げることができるだろう。さらに、場所や時間を気にせずに日誌を作成・閲覧することができるため、今まで下書きを経てペンで清書をしていた実習生の二度手間を減らし、日誌作成時間を大幅に減少させることが期待できる。実習日誌作成の大変さなど、保育の本質と異なる部分によってドロップアウトする学生を減少させることで保育者確保という社会的課題の解決にも寄与できる研究であり、早急の実証化を進めていきたい。

参考文献

- (1) 門傳みこ, 中桐齊之, 向坂幸雄: “保育実習の DX -Web アプリによる実習日誌作成支援システムの構築-, 情報処理学会, 第 86 回, 7ZM-03 (2024)
- (2) 中根成寿: “kintone を利用した社会福祉実習(ソーシャルワーク実習)記録の電子化の方法と意義 ver.1.0”, 京都府立大学学術報告, 第 13 号, 175-187(2021)
- (3) 坂本毅啓, 佐藤貴之, 中原大介: “福祉専門職教育における実習記録の ICT 活用に向けた課題”, 教育システム情報学会全国大会講演論文集, B5-2 (2021)
- (4) 糟谷咲子: “保育所・幼稚園における園務情報化の課題についての一考察”, 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 50, p9-20 (2018)
- (5) 小澤由理: “保育者養成における実習日誌の指導に関する研究—実習園への聞き取り調査から—”, 敬心・研究ジャーナル, p23-31 (2022)